同年七月廿日より五日間、信美會と聯合繪畫展覽會を、飯山小學校に開催せり。出品畫は大下、丸山、河合諸氏の水彩畫十數點、信美會員の作品水彩畫四十一點、日本畫二十點、本會員の作品六十三點を陳列せり。

四十二年三月廿日、幹事市川淨、同小林重治の二氏いつれも上京に付、本會外部會員に列し、宮本奬、岩上行秀の二氏代て幹事に就任す。

同年十月一日、日本水彩畫會本部との交渉就り、飯山支部設置の報に接せしを以て直に內外會員に此旨を報告す。

以上本會沿革の概要とす、之を要するに、本會は嚴整なる規約を設けす、極めて平易なる同趣味の團體なれば、常に和氣靄然たるものあり、展覽會其他諸雜費の如きは、主幹に於て其大部を負擔し、其他は、作品の賣却代、或は寄贈金等を以て之を支辨せり、目下會員は、內部會員二十二名、外部會員十名、いつれも研讃に怠らず、其成績の如きも漸次見るべきものあり。

（支部委員報告）

イツタ、カツタ、ダツタ集（鎌倉）

阿彌陀生

痛み入つたのは

△小島烏水先生のわざ〳〵御來遊の上、貴重な御話をして下さつて、また其上に御土產を澤山戴いたこと

△三條公爵は夫人と共に二度迄も會場へ御出下さつたこと

△『オヤ此書物は起つたり座つたりして輪廓をとつたのですか』『このビール壜はツヤケシにしましたれ』ナンテ先生の皮肉的御批評

お可笑かつたのは

△小林君の踴り、あの低い圓い身體を一層低くして腹の顏をいろ〳〵に表情姿勢をとらせた御手際

△丸屋の前で鎌倉ッ子と田舍ッ子との喧嘩『ヤイこの肥取りの田舍ッペイ、來られるならコヽ迄來て見ろ』『何んだコノ餓鬼共！テメィ達は石イ持つてゐるから危ないから往かないんだぞ』一方が勇を鼓して進むと一方は逃出す、また盛り返す

欲しかつたのは

△兩先生の御作一枚宛

△由井ヶ濱で照つけられた時、氷水一杯

恐入つたのは

△透視畫法の違つた建物を描いて一寸先生に强情を張り、それならゝ實地に比例をとつて御話されて成程！

△會員某氏の大天狗、多分御自身でも覺えがありませうれ

嬉しかつたのは

△ドーにもコーにも仕末が出來ずテコズッて困つてゐる時、靴の音がして先生の來た時

△先生達の快活であつたこと

△いよ〳〵紛失と思つた大切の先の切れた筆の出たとき

悲しかつたのは

△言はずと知れた講習が終つて先生達や會員諸君に別れるとき
△何故自分ばかりコー下手だらうと思つたとき
　驚き入つたのは
△繪を直して下さる先生達が、**チューブ**に半分程もあらうといふ澤山の繪具を筆の先へつけて大膽に描かれることで、中にはヒヤ〳〵してゐたのもあつた
△小島仙松君の朝鮮の『驚いた話』はネツカラ驚くに足らんことばかりなので却て驚き入つた
　殘念だつたのは
△**オトツサン**の有名な講談を一度も聽かなかつたこと、去年來約束といふのに怪しからぬ**オトツサン**ではある
△ゴゼン上等の納札を目つけて、剝がさうと思つたが何分高い處で手が届かず、三脚の上へ乘つてもダメであつたと
　口惜かつたのは
△見物人が僕の繪を見て『アツチの人の方が上手だれ』と言ひ捨てゝ起ち去つた時、何だい下手だから講習に出て來たのだい田舍者に何がわかるものかい！
△ツイ寢坊をして、先生が御飯前に寫生にゆかれたのを知らずに居た朝
　苦しかつたのは
△江の島からの歸りに電車の滿員立往生
△由井ヶ濱からの歸りの**スキハラ**
△たゞさへ暑いのに見物人に二重にも三重にも取卷かれた時
　厭だつたのは
△朝早く起きるの
△寫生中學生風の人間に後ろに立たれたとき
　奇拔だつたのは
△片桐君の聲
△宮崎君の笠
△佐久間の靴下
△中山君の寫生箱
△湊君の首手拭、その他　（完）

茶話會

餘興子

八月九日鎌倉丸屋樓上に於ける講習會々員の茶話會、其時の有樣を書いて、講習に御出席のない皆樣に御知らせ致せとの命令が、委員長から下つた次第でも何でもなけれど、物好きにも覺えてゐる處だけ申上ます、人名の如きは顏馴染淺き某甲のことゝて、少しは間違もあるかも知れません。
午後八時といふに、表二階四室うち通しの廣間、涙のやうに靑いと申たいが、其實大ぷ**エローオークル**的、否場處によつては**セピヤ**的の疊の上に、ズラりと並んだのは、先生御兩人を始めとして、紅一點の竹内女史**マサオ**少年、及び丸屋並びに建長寺其他から集まつた會員五十名、各々繪の上手ソーな顏つきな仕り、今夜の餘興の苦しそうな顏色な仕つて扣えたり。**オトツサ**